

ひとつながりの炊事場

東京郊外の住宅地を考える。車道に対して整列している戸建住宅は、コミュニティの喪失/孤立化といった危機的な状況に直面している。同じ街に並んで住むことに、もはや意味はなくなりつつある。そこにあるのは、ただただ合理性のみである。そこで、共に住むことの価値を取り戻すために、「ひとつながりの炊事場」を提案する。街区内の戸建住宅をつなぐように炊事場をつくる。食のシェアによって、人はつながる。みんなで料理したり、食べたり、おすそわけしたり、既存住宅の振る舞いも変化し、子どもから高齢者まで世代を超えたコミュニケーションの場へと進化していく。その一方で、この炊事場では、ガスや水、電気といったエネルギーもシェアされる。エネルギーの面からも同じ街に住んでいるという意識が芽生えるだろう。「ひとつながりの炊事場」は、人と住まい同士をつなぐ小さなコミュニティの核として機能し、集合して住むことの価値をわたしたちに(再)認識させてくれる。

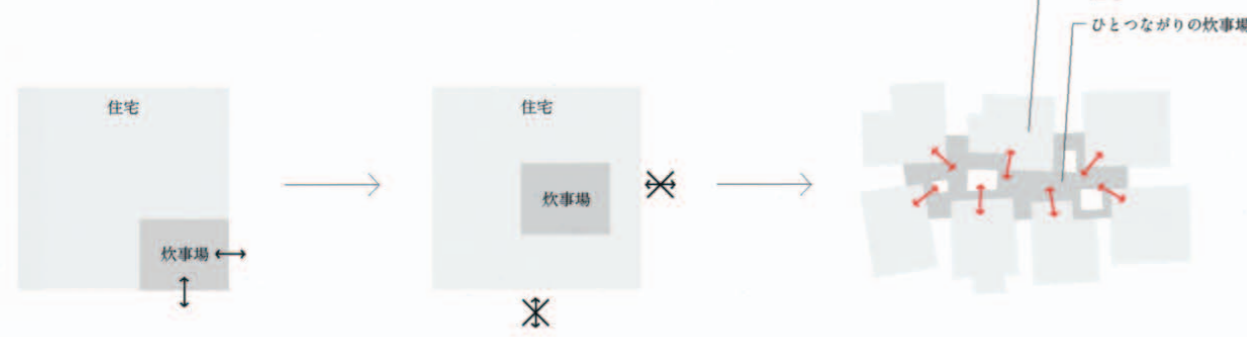


1. 食のシェアから始まる人のつながり



個人の孤立化という大きな問題に対して、食を共にするところから始める。炊事場がつながっていることで、小さな調味料の貸し借りから始まり、一緒に食事をしたり、料理をしたり、さらには趣味の共有や子どもの教育といった世代を超えた近所付き合いしたりと、人のつながりは徐々に深く、強くなっていく。

2. ひとつながりの炊事場



かつての炊事場は、防災・防水などの点から半屋外空間である土間にあり、内外をつなぐ境界であった。現代、炊事場が設備の進化によりフリープランを獲得した一方で、住宅は外界とのつながりを失い、孤立化していった。そこで、孤立化した戸建住宅を40坪のワンルームの炊事場をつなぐ。そこは、「食のシェア」を通して、人・住まい同士はつながり、小さなコミュニティとなる。

3. エネルギーのシェア



一般的に、エネルギー消費は各住宅で閉じた系の中で、様々な形で発生している。

4. 街区内部のデッドスペースの効率利用

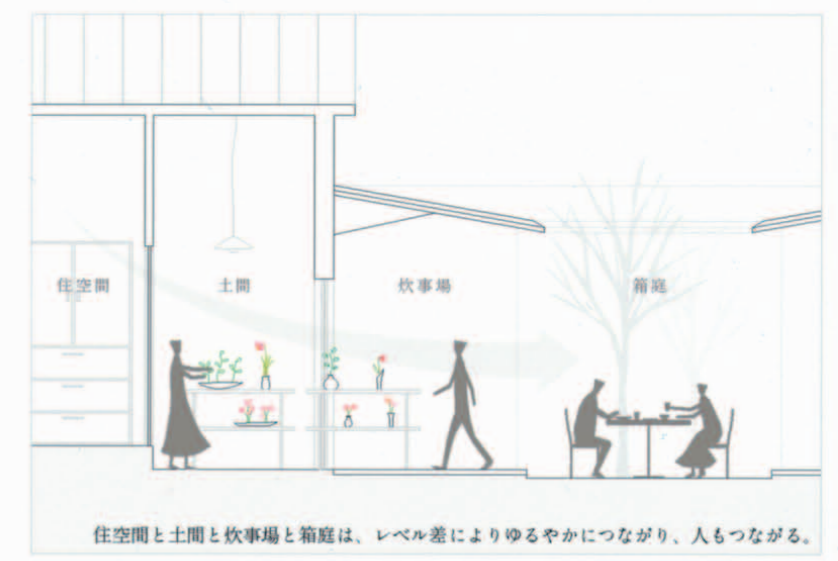


車道に向けて整列している住宅では、一方向への意識しか存在しない。街区内部の隙間には空間を埋めるように木が植えられ、無駄な場所となっている。

炊事場という系の中で、台所のシェアを通じたエネルギーシェアが実現する。そこから、共に住んでいることへの意識が芽生える。

炊事場を置くことで、街区内の内側(隣人)への意識が生まれる。街区内部の無駄な空間は、人が使う空間へ転換する。結果的に空間利用の効率化へとつながる。

5. 既存戸建住宅の振る舞いの変化



敷地は、東京郊外の住宅地のある街区。ひとつながりの炊事場は、住人の意識を変え、既存住宅の振る舞いさえ変える。各住戸から炊事場へのアプローチには、土間空間が現れ、外部とゆるやかな関係性が生まれる。庭いじり、日曜大工、素振り、音楽鑑賞... 現代の土間空間は多様性に溢れていく。そこからコミュニケーションはさらに広がる。やがて、住人たちは、集合して住むことの価値を(再)認識する。ひとつながりの炊事場は、そのための1つのきっかけである。